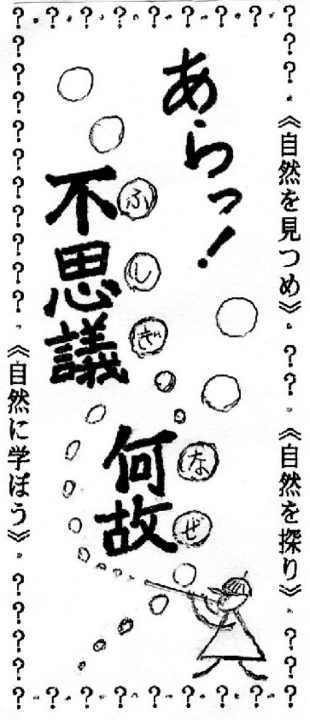


自然談議・科学談議



NO. 49 (通算49)

絵・文・題字 渋谷 一夫

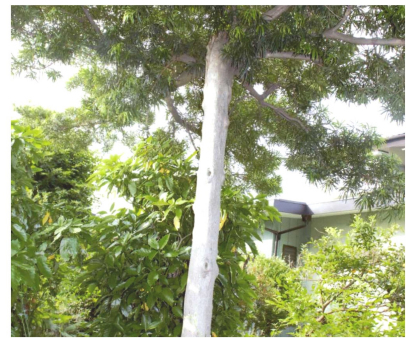
我が家の天然記念木③ 「太くなれないマキ」

9月の老柿「禅寺丸」と10月の「金木犀」の間にはさまれて、ひっそりと生き延びている庭園樹がある。「イヌマキ」というマキ(榎)だ。私が子供の頃には、藁ぼっちの軸木によく使われていた木だ。今も元気で成長しているが、あれから80年も経つのに太くなれないでいる。何故だろう。

わが家には、もう一本なかなか太くなれない珍しい老木がある。イヌマキという庭木だ。私が子供の頃には、藁を架けて藁ぼっちにした。だが、その頃も、太さが既に20cm近くあったのに、今でもあまり変わらず、太さ

は20cm前後だ。でも元気に生きています。

何故太くなれないのだろう。不思議だ。その理由を考えてみた。



樹皮がはがれ、主幹の木質部が堅くなった、マキ

「マキは大木になる」

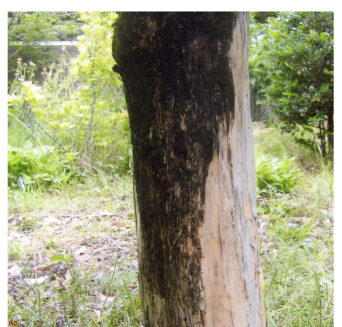
マキは、千葉以西の暖かい場所に生える常緑の針葉高木だ。条件さえよければ樹高20m太さ2m

にもなるはずだ。

だが、わが家のマキは太さが相変わらず約20cmだ。樹高も5、6mだ。もう70、80年前からこの太さだ。不思議だ。藁ぼっちの軸木にしたからだろうか。それともはがれ易い樹皮を藁かけのために、はがってしまったからだろうか。謎は尽きない。その理由を考えてみた。

その理由は…?

マキの主幹は灰褐色の樹皮で覆われている。だがその皮は、写真のように縦に浅く裂ける。この樹皮をはがすと灰白色の



幹からはがれるマキの樹皮

木質部が出てくる。この木質部は、日光や風雨にさらされると、表面が枯れた木のように硬くなってしまう。まるでコンクリートのようだ。これでは太くなれないだろうと、気の毒に思ってしまう。

の主幹の上部を見ると、枝葉が左右に元氣よく広がり成長している。堅くなった木質部の表面は、所々に穴が開き、アリや小さな虫たちの生活の場になっている。不思議な樹木だ。普通なら、もうとつくに枯れているはずなのに。

シロアリに強い

でも、マキ自体は生きています。根から吸い上げられた養分は、主幹の木質部の中心付近の導管を通って、しっかりと吸い上げられている模様だ。先端部分の枝葉の張り具合を見てもよく分かる。だから、太くなれなくても生きているのだと私は推測している。その堅くなった灰白色

このマキは、一般的には庭木や生け垣として植えられるが、シロアリの害に強いので、建材や桶材としても活用されているようだ。樹皮がはがれて、木質部表面が堅くなっても枯れずにいることと、シロアリの害に強い事との間に、何か関係がありそうな気がする。研究してみる価値はありそうだ。